

～旧約聖書を読んで感じること～ (66) アブサロムの反逆と死

エルサレムに帰ることを許されたアブサロムは父ダビデに対し、憤懣やるかたなく、悶々としていましたが、ついにハッキリと叛意をいだき、王位を奪おうと決心しました。そのため、戦車、馬、50人の護衛兵を整え、早朝から城門の道の傍らに立ちました。王のもとへ争いごとの裁定を求めてくる人すべてに声をかけました。「お前の訴えは正しいし、弁護できる。だがあの王のもとでは聞いてくれるものはいない」「私が裁き人であれば、皆、正当に裁いてやれるのに」また、彼に近づいて礼をする者があれば、手を差し伸べて、抱き、口づけしました。

イスラエルの中でアブサロムほど、その美しさをたたえられた男はなかった。足の裏から頭のとっぺんまで、非のうちどころがなかった。(サム下 14:25) アブサロムの美しさは群を抜いていましたし、力があり、民にいかにも愛情深く接したため、民はアブサロムに魅了されていきました。

やがて 40 歳になった時、「主に仕えると誓願を立てているので、ヘブロンで果たさせて下さい」とダビデに許可を求め、ヘブロンへ向かいました。これは策略でしたが、何も知らずにアブサロムに従った多くの人もありました。アブサロムはダビデの顧問であるアヒトフェルを自分の司令官に引き込み、陰謀を固めていきました。「アブサロムがヘブロンで王となった」と言うように密使を全土に送っていました。この事態をダビデに伝える人がいて、ダビデは戦いを避けるため、ヨルダン川を越えて、逃げる決断をしました。

「直ちに逃れよう。アブサロムを避けられなくなるとはいけない。我々が急がなければ、アブサロムがすぐに我々に追いつき、危害を与え、この都を剣にかけるだろう。」(サム下 15:14)

ダビデは泣きながら逃避行をしていきましたが、祭司ツアドクに信頼できる若者と共にエルサレムに留まるように指示し、知らせを待つと言いました。また、アヒトフェルが寝返ったことを知り、友人フシャイをアブサロムのもとに送り、アヒトフェルの作戦を覆すよう頼みました。ダビデの戦術の才能はこの危機の時でも衰える気配はありません。また、この逃避行も神に委ねました。

神の箱は都に戻しなさい。わたしが主の御心に適うのであれば、主はわたしを連れ戻し、神の箱とその住む所とを見せてくださるだろう。(サム下 15:25)

一方エルサレムに入城したアブサロムはアヒトフェルの提案を受け入れ、まず、王宮に残っていた父ダビデの側女たちを全イスラエルの注目の中で凌辱しました。次にアヒトフェルは「今夜のうちにダビデを急襲し、兵士を逃げ出させ、ダビデ一人を自分が討つ」と提案します。それに対し、送り込まれたフシャイは反対し、「ダビデが戦術に秀でているので、アブサロムが全軍を集結して、自ら引率して戦闘に出る」提案をしました。フシャイの提案が受け入れられ、それがダビデに伝えられ、ダビデ



アブサロムの死 J.Tissot

側も準備が整いました。けれどもダビデは「若者アブサロムを手荒には扱わないでくれ」と命じました。エフライムの森で戦闘が始まりましたがアブサロム側は大敗北となりました。アブサロムは、ダビデの家臣に会った時、彼はラバに乗っていましたが、ラバが樫の大木の絡まりあった枝の下を通ったので、頭がその木に引っ掛かり、ラバは走りすぎ、宙づりになってしまいました。兵の一人がダビデの将軍ヨアブに知らせました。ヨアブは「なぜその場で打ち落とさなかったのか」と叱責します。王の命令ですと兵は答えましたが、ヨアブはまだ生きていたアブサロムの心臓に 3 本の棒を突き刺し、とどめを刺しました。やがてダビデはアブサロムの死を知り、身を震わせて泣きました。「私の息子アブサロムよ。私の息子よ。私の息子アブサロムよ。私がお前に代わって死ねばよかった。アブサロム、私の息子よ、私の息子よ」(サム下 19:1b)